2025年3月16日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

取り戻された私たち

［マタイによる福音書21章12～17節］

それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている。」

境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉をまだ読んだことがないのか。」 それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニアに行き、そこにお泊まりになった。

[1] 「心」が置き去りになっていないか

　今日は教会の定期総会が午後に持たれます。今の私たちの教会を見つめ直し、4月からの新しい年度のことを話し合い、祈る大事な総会ですが、その日に、今日の聖書の箇所が開かれているのは、私は何かとても大きな神様からのメッセージを感じます。今日の聖書の箇所でイエス様が問うているのは「神殿とは何か」ということです。ここでは当時のユダヤ教の神殿のことですが、私たちはこれを今、「教会とは何か」ということとして考えることが出来るように思います。

皆さん、「教会」って何なのでしょうか。「教会」が存在する意味って何なのでしょうか？「礼拝を捧げる場所」、「イエス・キリストを伝道していく拠点」、「世代を超えた交わりが出来るところ」etc…。色々な言い方が出来ると思います。また、皆さんなりに「教会」を大事にしている要素もあると思います。「マイ・チャーチ」と言いますか。「私にとっての川越教会はこういう所」と言えることがあるというのは良いことだと思います。しかし、それと共にと言いますか、それ以上に、と言った方が良いかもしれませんが、私たちが教会を愛する、というよりも、実は「教会」が私たちのことをしっかりと掴んでいるのです。それはどういうことか。「教会」と言うのは、本質的には目に見えないものです。私たちと主イエス様との出会いというのは目には見えません。それは、私たち一人ひとりの祈りの中で起こることですね。イエス様は今日の箇所の中で、神殿で売り買いをしている人を追い払われたり、両替人や鳩を売る人たちの机や椅子を倒されました。主はこのように言われました。「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。それなのに…」と。嘆きと憤りがあったんです。私たち、こういうイエス様のお姿は、ちょっとイエス様らしくないと思ってしまいます。けれども、もしかすると一番イエス様らしいのかもしれない、と今回読んでいて思いました。イエス様、ここで、身を張っているのです。私たちが神様に愛されているという、その事実に何度でも立ち帰れる場所が神殿であり、教会である筈です。しかし、それがあまりにも気軽と言いますか、いつしか、形だけを整えた神殿詣で・礼拝となっている神様との交わりの形骸化、はりぼて化に陥っている現実と、それを助長させてしまっている神殿における売買などのやりとりに、イエス様は深い悲しみを感じ、それがこのような行為に現れたのではないでしょうか。

ローマの通貨からユダヤの通貨に両替が出来たり、生け贄を捧げる際、貧しい者は牛や羊でなく山鳩に替えても良い、とレビ記にもあり、そのために鳩を売っているというのは便利なシステムです。問題は、その点です。サービスが行き届いていて、神殿詣でや礼拝に赴くことが軽くなる。「心」が置き去りになっていると言いますか。これ、笑えないです。最近、「コスパフォーマンス（コスパ）」「タイムパフォーマンス（タイパ）」ということが当たり前に言われます。つまりいかに安くとか、いかに早くというのが賢い選択と言われる。しかしどうなのでしょう？神様の前に出るって、楽だからする、ということではないでしょう。私たちが神様の前に出るということは、旧約の時代であれば、焼き尽くす献げ物を携えて出るのです。そうでないと、神様との関係が正常化されないのです。しかしよく考えてみると、本来なら、献げられるべきものは‟私自身”なんです。けれども神様は憐みによって、私たちではなく動物を生け贄の献げ物とすることで、その香が神様への芳しい香りとして立ち昇り、私たちがもう一度神様のものとして取り戻されるのです。罪が赦されるのです。その霊的な恵みが、この神殿の境内でまるで便利に売り買いされ、「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」と言われているその「祈り」が失われている、悔い改めが失われている、そのことにイエス様は深い憤りを覚えられたのではないか。私にはそう思われます。

[2] 子どものような賛美のこころを与えて下さい

そして、マタイによる福音書では、いわゆるこの「宮きよめ」の話の中で他の福音書には記していないことが出てきます。14節以下ですが、「境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた」とあります。また、「イエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、『ダビデの子にホサナ』と言うのを聞いて（祭司長や律法学者たちが）腹を立て」た、とあります。イエス様がここに来られることで何が起こっているか。当時神殿礼拝に与れなかった人たち、目が不自由だったり足が利かない人々が癒されているという救いの出来事！また祭司長や律法学者たちから全く軽く見られていた子どもたちの真直ぐな讃美の声が神殿境内に響いています。これは凄いことです！神の国がここで出来事になっているのです。そうです、どんな者も神様に愛され、神様のものとされるという恵み。それが起こる場所こそ神殿・或いは教会と言う所です。子どもたちの無邪気な讃美、いいですね。私、最近とても思うのですが、例えば3～4才位までの小さな子どもたちってどうしてこんなに屈託がないのだろう？と考えるのです。思うに、今自分の心に起こっていることをそのまま言葉にするのですね。孫と遊んでいると本当にそう思います。まだ大人のような取引はせず、小さい時は体と心が全く一緒に動いているように思えます。これは小さな子どものもつ素晴らしさ・特権じゃないかと思います。

イエス様は、祭司長たちや律法学者たちから、境内で子どもたちが叫んでいるのを何とも思わないのかと尋ねられると、何言ってるんだと言わんばかりに詩編8編の言葉を引用されましたね。「『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉をまだ読んだことがないのか」と言われました。イエス様は、神様ご自身がその讃美の声と心を与えて下さっているのだ、これこそ神殿に相応しい声ではないか？と、自称・信仰深い先生方に切り返されたのです。痛快ですし、また、考えさせられます。…私たち自身はどうなのか問われます。幼い子どもたちのような真直ぐな心・ハートを少しでも与えられたい、と思うのです。

私は、そのハートを取り戻させるためにこそイエス様はこの神殿の宮清めの出来事をして下さったように思えてなりません。自分自身、礼拝に臨む心が単に習慣化してはいないか。祭司長や律法学者にように、何か、礼拝行為を「やった感」に陥っていないかと問われるのです。

私はこの物語で特に「売り買い」と言う言葉が引っ掛かりました。礼拝とか讃美は、私たちの魂の出来事です。売ったり買ったりできないものじゃないですか。神殿での商売、それは恵みの安売りです！本当の魂の救い、本当の癒し、そして賛美はもっと重たいものです。そしてそれは売買できないものです。ですからここに、主イエス様が入り込んで来て下さったのではないでしょうか。イエス様はこうおっしゃっているように思います。あなたの救いは、簡単に手に入るような安っぽいものじゃない。そうであれば、何度でも買い戻す必要が出てきてしまう。そうじゃない。あなたの救いは、何かの動物の犠牲によって完成するものではなく、私があなたの身代わりとなることで完成する救いだ。あなたのいのちの価値は、牛や羊や山鳩に比べられない。私のいのち、神のいのちがかかっているものだ。それだからあなたは本当に神様のもとに帰って来ることが出来たのだ、そのことを、子どものように心いっぱいに喜びなさい、讃美しなさい、と語られていると思います。

イエス様はろばの子に乗ってエルサレムに入られて、そして今日の物語があり、その後、エルサレムから、郊外のべタニアに滞在されます。あの、祈りの中で神様と格闘されたゲツセマネはすぐそばです。イエス様は退路を断っておられます。ご自身おかかりになる十字架を見据えておられます。それはまるで商売の道具のように軽く捉えられている私たちのいのちを、本当の意味で取り戻すため、ご自分を神の小羊として献げる時のために覚悟を決めておられるということなのでしょう。「教会」とは、この主イエスが私たちに出会おうとされる場所です。罪人である私たちの口に讃美を与えて下さる交わりがここにあります。お祈り致しましょう。

神様、あなたを賛美し、礼拝が出来るということ、そこにはあなたの深い愛と覚悟があったことを思います。心から感謝致します。今、受難節を共に過ごしていますが、あなたの計り知れない恵みを心に刻み、あなたの御名を讃美しながらこの時を過ごさせて下さい。「教会」を祝福し、新しく向かえる年度も、あなたのみ思いに適った応答が出来るように導いて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。